

株式会社真田

生活の場の資源回収は安全第一！

昭和初期、物のない時代には一升びんもビールびんも貴重だった。そこで始めたびん回収と再利用の流れが社の前身となり、現代の資源回収事業へと発展してきた。生活道路での作業では八方に目を配り、「無事故で帰る！」を最大の目標に掲げる。

取材・執筆 吉岡耀子(交通ジャーナリスト)

「びんがもったいない」 昭和初期から現代SDG'sへ

社は葛飾区に本社、栃木や千葉に支店・営業所を置き、家庭から出されるびん、缶、ペットボトルというなじみ深い資源ごみを回収している。昭和初期には一升びんやビールびんなどの数は少なく、廃棄するのは「もったいない」と感じた社の創業者は回収と再利用への道筋を作った。今でもこれらはリターナブルびんと呼ばれて、洗びん工場で洗浄された後その形のまま再利用される流れができています。

社では自治体からの委託を受けてこの事業に携わり、同時に缶とペットボトルの回収作業に携わっている。本社では回収のた



▲社屋



▲出庫



▲後退誘導

めの車両として軽トラック、2〜8トンの平ボディー車、箱型車、塵芥車を所有し、ドライバー33名と車両に同乗する積み込みスタッフ8名で回収作業を行っている。

資源回収の最大の特徴は、生活道路における作業であることといえる。狭い道路に戸別に、あるいは回収場所にまとめて出されている資源を回収車に入れるために、積み込みスタッフは車から道路に降り立つ。回収と同時になるべく歩いて車両前後の安全を確認し、後退や左折時の誘導を行うようにしたところ、それ以前にあった事故がなくなり、安全は格段に向上した。

生活道路では徐行を徹底。 登校時間を避けて回収作業

生活と密着した場での作業なので、車両の徐行は徹底している。生活道路や交差点では「必ず自転車や歩行者がいる」という前提で運転し、特に塵芥車は平ボディー車より自重がはるかに重く制動距離が長いので、最徐行をするように常に注意を喚起している。また、保育園や小学校付近の道路では、登校時間と資源回収時間が重ならないように収集時間を変更している。

地域の安全は社にとって大変重要な事項で、社長が町会役員を務め青色回転灯を装着した青色防犯パトロール車「青パト」に町会役員と同乗して地域を巡回するなど、安全広報活動にも参加している。

なお、新潟や福島などの豪雪地域での作

健康管理と事故の振り返りで 安全運転第一の職場風土！

業もあるので、冬季が近づくると運転注意やアドバイスを行い、走行不能になる前にタイヤチェーンを装着するよう、実地の講習会も行っている。

社ではすべての運転者に対して運行管理者による点呼を徹底している。出社時には運転者の当日の体調や睡眠状態の報告、アルコール検知と運転免許の有効性確認を義務付け、帰社時にも同様の点呼を行う。

社では運転者の健康管理を重視して毎月の安全運転講習会で食生活や生活習慣に関するセミナーを行っている。社員一人ひと

りが適切な休養とバランスの取れた食事を心がけ長期的に安全な運転が継続できるように、心身両面からのサポートに努めている。

安全運転教育として年に1回、自動車保険会社の講師によって、ドライバーや積み込みスタッフが社内事故について振り返る場を設けている。ドラレコ映像や危険運転記録などの説明を聞き、話し合うことでヒヤリハットの学習を積み重ねている。

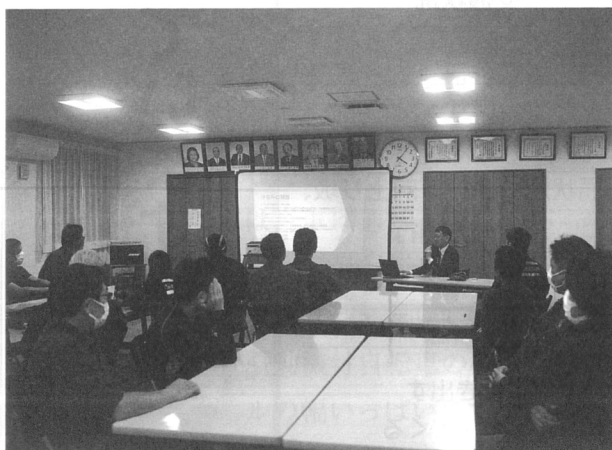
代表取締役の真田明男さんは、心のゆとりが失われたときに事故が発生しやすくなると考えて、「安全は第一」をすべての業務の基本に据えている。事故を起こした運転者には個別面談を行い、運転時の心身の状態や背景を丁寧に振り返るよう努める。「すべての運転者とスタッフが無事故で会社に戻ってくるのが最も大切。皆が安心して作業できる職場づくりと、安全運転を第一とする職場風土を守り続けます」と真田さんは抱負を語った。



▲びんは回収後に工場で洗浄



▲タイヤチェーン装着の指導



▲ドラレコ映像を使いヒヤリハットを学ぶ



▲安全運転管理者・真田さん(右)、
運行管理者・牧野さん(左)